

公開シンポジウム

「地方で医史学の花を咲かせよう」-2

出雲国の医学

梶谷 光弘

公益財団法人いづも財団

松江藩、島根県の医学史については、藩医の家系である開業医の米田正治氏が家蔵の史料をはじめ松江赤十字病院所蔵の古医書、また同僚の医者先祖を調べて著書や論文を公表されてきた。一方、著者は長い間教育現場に籍を置き、最初は教育史に取り組み、次第に医学史へと研究を進めてきた。そこで見えてきたのは、弛まず学ぶ医者姿とその広がりである。

1. 医学史研究の発端は教育史研究

勤務校の文化的背景を調べるため、江戸時代、地域に在った私塾や寺子屋を調査していた。同時に、藩校の変遷と幕末維新时期における小学(校)開校までの動きを探っていた。その結果、松江藩では寺子屋師匠の身分は医者と神職の割合が他藩に比べて非常に高く、明治6年に旧島根県内で創設された小学には多くの医者が関わっていたことが明らかになった。

2. 医学塾などの門人録に着目し、藩医と在村・在町の医者の史料調査

松江藩内の医者の動向を知るために、藩内外の医学塾をはじめ漢学塾、国学塾、兵学塾などの門人録調査を開始した。これらを見ると、出雲国や松江藩からの入門者は18世紀半ばから増え、その身分は医者が断然多く、また藩医よりも在村・在町の医者が多いことが判明した。また、県史や市町村史などに記載されている医者に関わる史料調査を行うと、医者は自己課題を解決するために弛まず先進的な医学を求めて学び続けていた姿が見えてきた。その後、ポルトガル船が銀を求めて石見国へたびたび来航していた事実を知り、これまでの調査範囲を出雲国から少しずつ石見国にまで広げている。

3. 松江藩校の蔵書調査と漢医学校「存濟館」の役割の変遷

松江藩校の書籍には「雲藩図書」、「軍務図書」など多くの蔵書印が捺され、分野としては医学と軍事が群を抜く。とくに「松江藩醫籍之記」の蔵書印が捺された古医書は150種を超え、松江藩漢医学校「存濟館」のカリキュラムとの関連がうかがえる。一方、「存濟館」は私塾から藩立医学校へ移行する過程において権限を強め、維新时期には松江藩が進める西洋医学転換への政策にその体制を連動させていた。だが、ドイツ医学への転換は困難を極めた。

4. 華岡家門人大森家との出会いと華岡家本家・分家の史料調査

松江藩の支藩母里藩に在った医学塾「奇正軒」を調査している時、故大森史郎氏と出会い、旧島根医科大学(現島根大学医学部)に寄贈された医学書と、それまで家宝として家蔵されていた華岡青洲肖像画などを閲覧することができた。これらの目録を作成するとともに3代大森泰輔の事跡をまとめるために約10年の年月を費やした。その後、華岡家の本家・分家の方々とも交流し、そこに家蔵されていた史料をすべて閲覧し、4種類の門人録を整理して2,250余名の門人を明らかにした。この時初めて明らかになった明治15年までの門人について改めて調査を進めるとともに、最近では、青洲の筆跡の特徴を

明らかにし、彼の自筆本が存在していたことを追求している。

5. 出雲国造家の蔵書とそこに仕えた医者 of 史料調査

国造家が古くから行っていた医療に注目していたが、千家・北島両国造家の史料が自由に閲覧できないため、これまで『大同類聚方』に関する史料を中心に調査してきた。ところが最近、国造家にある数種の蔵書目録と書籍の一部を閲覧することができた。一方、両国造家へ出入りした30名近くの医者の子孫宅で史料調査を行うと、北島国造家に仕えた医者が神職構造の一つである近習職を与えられ、松江藩内の医者とは一線を画した動きをしていたことが明らかになりつつある。